



# ペナンで培ったフロンティア精神を忘れずに マレーシアでのインターンシップを終えて

涙がでるほど感動したり、悔しがったり、別れ惜しんだり。そんな旅を、この夏、経験したのが、国際観光コースの15人の仲間たちだ。

中央大学のインターンシップ科目に今年度、初めて海外3コースが設置された。その1つ、国際観光コースでは、マレーシアのペナンを舞台に就業体験プログラム(2014年8月24日～9月14日)が組まれた。

激動の22日間だった。ペナン国際空港に到着すると、迎いのバスが来ない。初日から、給湯の不具合で冷水シャワーを浴びせられた。肝心な就業体験とは言えば、初の学生受け入れにプログラムも暗中模索で、たどたどしいスタートだった。マレーシアらしいと言えばそれまでだが、引率した自分ですら「こんなはずでは」と感じたものだ。学生たちが、いかに心細く思ったことか。しかし、これは困難の序章に過ぎなかった。

いくつもの難題に見舞われた。ホームステイ宅から就業先のペナン州観光局オフィスまで、ローカルバスで1時間を超すものもいた。そのローカルバスに、時刻表はない。ペナンの街を走るバスは、停留所があっても定められた運行スケジュール

がなく、ましてや運行しない日もある。タウンマップづくりに日中は、熱暑のなかを歩き回り、体力の消耗も著しい。慣れない暮らしと緊張感から、体調を崩し始めるものもいた。

1週間が経ち、引率の教職員が現地を離れる日がやってきた。そこで、学生たちとのミーティングの時間をもった。精神的にも体力的にも、もっとも辛い時期だったはず。気持ちを押し殺しながら現状を、今後のことを語るなか、皆が最後は涙した。

漫然と過ごしたくない。受け身の姿勢だけで終わりたくない。そうした熱い想いから、ペナンを訪れる外国人観光客に路上で、街頭インタビューを始めたチームが現れた。自由行動が許された休日には、ランカウイ島へと足を伸ばしたグループもあった。自らが考え、課題を解決して、より納得のいく滞在にしたい。アルバイトや親からの借入等々、あらゆる努力で旅費を工面して、期待をもって参加したプログラムを、「絶対、成功させるんだ!」という心の変化と気概が伝わった。

学生たちだけでの残りの2週間が厳しくも充実していたことは、成田空港に出迎えたときの笑顔でわかった。現地での最終発表会が成功裡であつたと、現地からすでに寄せられていた。だが、疲れ切っているのではなかろうか。学生の数だけおにぎりを握って、長旅の労をねぎらった。一期生としての苦悩、矛盾だとか不条理を、すべて乗り越えての無事の帰国である。よくぞ根を上げ



ず、落伍者なしで、やり遂げた。

帰宅の途につく学生たちと別れて帰り道、東関東自動車道を、ハンドルを握りながら自身に思いを馳せた。この人生、幾度となく成田から、海外へ旅立ったことか。友を送ったり、見送られたりした。先輩として教員として、輪廻を感じた。まるで人生そのものが、旅のようだ。

私ごとだが大学を卒業して、男女雇用機会均等法一期生として社会に旅立った。当時の私の頭の中は、矛盾や不条理のオンパレードだった。しかしそれも、先を走るがゆえの苦悩だったと、後から理解した。道を切り拓くことは容易ではない。学生の皆さんには、フロントランナーであることを誇りに、これからの人生にペナンでの日々を活かしてほしい。

来る2014年12月6日、「経済学部インターンシップ体験報告会」が開催される。20周年の節目となる記念の報告会だ。その大舞台上で、本コースの集大成を発表する予定だ。

略歴 ちば・ちえこ 観光ジャーナリスト。  
中央大学経済学部インターンシップ科目国際観光コース客員講師・横浜商科大学非常勤講師。  
中央大学経済学部1988年卒。1996年有限会社千葉千枝子事務所設立。著書に「観光ビジネスの新潮流」(学芸出版社)など多数。



休日の昼下がり、トライショーと呼ばれる乗り物でペナン市内を巡る学生たち。さまざまな目線で視察が行われた

の最終発表会が成功裡であつたと、現地からすでに寄せられていた。だが、疲れ切っているのではなかろうか。学生の数だけおにぎりを握って、長旅の労をねぎらった。一期生としての苦悩、矛盾だとか不条理を、すべて乗り越えての無事の帰国である。よくぞ根を上げ